

永久保存版 いま「受けるべき検査」と「いらない検査」

特別付録

がん 脳卒中 心筋梗塞 糖尿病 の予兆がわかる

- ①書き込み式 未来の「病気リスク」判定シート  
②検査の時に「もらえるお金」一覧表

文字も図版も大きくなつて読みやすい、わかりやすい!

週刊

マネー&ライフ増刊シリーズvol.2

# 正しい健康診断

2020 Jul. 7.1 定価850円

2020年6月24日(水)発行 免責第52巻第22号通巻2564号昭和44年9月11日第2種郵便物承認

現役医師20人に  
聞きました

私が「もうやめた検査」  
いま受けている検査

検査を「どこで受けるか」で寿命が決まる

「総合病院の人間ドック」「専門病院のがん検診」「どっちが優秀か

胃カメラが「上手い医者」「へたな医者」はここで見分ける

「異常あり」と診断されても「すぐに受けなくていい手術」

# 医療検査に騙されてはいけない

健康なのに「要治療」、病気なのに「異常なし」どちらも悲劇です

**完全ガイド** 安心して受けられる**最新検査** がん遺伝子検査 A-I 胃カメラほか  
検査では見つからない「体が発する重病サイン」 血圧150でも問題なし?「基準値」のウソ・ホント

新型コロナ「PCR検査」はどこまで信用できるのか

# 肺も、胃も——「リスクの高い検査」を受けるべきか、避けるべきか 「がん」を見つける検査を受けて「患者」が死亡した実例——こんなにある

## X線検査には限界がある

日本人の死因1位であるがん。健康寿命に関わる重大疾患だけに、健康診断ではがんに関連する項目が多い。

だが「異常なし」と診断されても過信は禁物だ。実際に日本人男性の部位別がん死亡数第1位の肺がんにおいて「胸部X線検査（レントゲン）」で異常が見つからなかつたのに、その後がんで患者が死亡した事例がある。

18年1月、東京・杉並区にあるクリニックが、区から受託した区民健康診断の肺がん検診として、

40代女性の胸部X線検査を行なった。検査画像には腫瘍の影が写っていたが、担当医師2人は「異常なし」と診断した。

しかし受診から約3か月後、女性は呼吸困難や手足のしびれを訴えて、同年6月に死亡した。

問題が明るみに出るとクリニックは、14～17年の肺がん検診で「異常なし」と診断された約9400人分の検査画像を再検証。その結果、70代の男性2人が肺がんと診断された。そのうちのひとりが、杉並区在住の70代

男性Aさんだ。

Aさんは17年8月にクリニックで胸部X線検査を受けた際、画像診断で

「異常なし」と診断されていたが、女性の死をきっかけに1年後に受けた再検査では「ステージ3の肺がん」を言

い渡された。

Aさんは現在、別の病院に通い抗がん剤治療を続いている。

「当時Aさんは『かかりつけ医としてクリニックを信頼していたのに』と、非常に落胆していた。治療のためアルバイトもやめざるをえない状況で、経済的にも苦しんでいた」（梶浦氏）

この杉並区のケースを



「17年の検診画

東京・杉並の肺がん見つけた患者の胸部X線画像について会見で説明する梶浦弁護士

像には明らかに異常を疑うべき影が写っています。板に最初の検査で肺がんが見つかっていれば、Aさんはステージ1程度ではなかつたかと考えられます」

Aさんは現存、別の病院に通い抗がん剤治療を続いている。

「当時Aさんは『かかりつけ医としてクリニックを信頼していたのに』と、非常に落胆していた。治療のためアルバイトもやめざるをえない状況で、経済的にも苦しんでいた」（梶浦氏）

この杉並区のケースをきっかけに胸部X線検査の見落としが注目を集めています。

## 腸に穴があく

制度上の問題点もある。医療事故に詳しい石黒利子弁護士が指摘する。「本来、X線画像を診断するのは放射線専門医が望ましい。しかし法的に医師免許を持つ者なら誰でも診断できるので、医療機関によっては研修医のアルバイトがX線画像を任されることが多いのが現実です。専門的な知識や経験の乏しい医師が診断することで、がんを見落とすケースが少なくない」

肺がんを調べるうえでレントゲンしか選択肢がないならある程度のリスク

クは許容せざるをえないだろうが、そうではない。「より高精度で発見できる検査が採用されていないことが問題です。小さかつたり、ほかの臓器に隠れていたりする

などの理由でX線検査では見つけられないがんでも、「低線量CT」なら見つけることができます。自己負担で1万～2万円程度で受けることができます」（上医師）

ウムがきちんと排泄できなかつた場合に起りこむる症状（上医師）だ。15年5月には、バリウム検査を受けた50代の女性が、検査台が傾斜した際に台から転落。台と壁に頭を挟まれて死亡する事故が起きている。

また、バリウム検査は

「胃がん検査の選択肢としてバリウム検査しかなければ仕方ないが、こちらも肺がんと同様に、より高い精度で調べる検査が存在する。上部消化管内視鏡検査（胃カメラ）だ。

（胃カメラは画像診断の精度が高く、直接胃の組織を採取して病理検査を行なうこともできます）（上医師）

現在は自治体が実施する胃カメラが選べるようになった新潟市では、内視鏡検査の胃がん発見率がバリウム検査の3倍になつた。

胃カメラが選べるようになってから胃がん検査での胃がん検診でも、50歳以上なら胃カメラを選択できるようになりつつある。選択肢があるなら、胃カメラを選んだほうが良い。

たが、「これは医師のレベルが低かった、という問題ではありません」と指摘するのはNPO法人医療ガバナンス研究所事長の上昌広医師だ。

「もともと胸部X線は結核を調べるために健診診断に導入された検査でした。しかし、副次的に肺がんも見つけられる。ことや、機材が安価で導入しやすいこともあり、健診診断の項目に採用された経緯がある。初期の肺がんは1～2cm程度ですが、X線写真は解像度が低く、その大きさのがんを見つけられないので可能性が高いのです」

日本医療機能評価機構の報告では、胸部X線検査における肺がんの偽陰性率（実際は陽性なのに「陰性」の検査結果が出た割合は、最大で50%だったとのデータがある。

日本人男性の罹患数第1位の胃がん。造影剤のバリウムを飲みほした後、全身を検査台に固定されてグルグル回転させられる胃部X線検査（バリウム検査）が定番だ。

しかし、バリウム検査には、「検査自体が原因で死に至るケース」がある。

日本消化器がん検診学会の報告によれば、2014年度に実施されたバリウム検査のうち死亡例が2件ある。1件は88歳の男性が腸閉塞を起こしたこと、もう1件は大腸の一部に穴があく穿孔が原因だとされている。

「いずれも検査後にバリウム検査で撮影される胃の画像は不鮮明で、胃の有無を判断するの